

機構はカンボジアの村落に対して無関心であったかもしれない。ベトナムにおいてフランス植民地当局がおこなったような村落慣習調査はおこなわれず、村の歴史や生活に関する記録の提出を求めることも無かったかもしれない。また、行政文書も区や村落のレベルまでは残されていないのかもしれない。

しかし、繰り返しになるが、著者は VL 村を単位としてカンボジア農村を記述し分析しようとしているのに、その村のまとまりがみえてこないのである。仏教寺院は、村落の結節点にはなりえない。本文中の記述でもわかるように、VL 村には仏教寺が無く、村人は同じサンコー区の SK 寺と PA 寺の活動に参加している。この場合にも、どちらか一方の寺を排他的に選ぶ村人は、ごく少数であった。著者もいうように「地元住民とある寺院の結びつきを村落単位で示すことは（中略）現実をそのまま伝えるものではない」「ある寺院を支持するといった形で、寺院と村落の関係を直接的に対応させることは困難」（いずれも p. 387, 注 5）である。

日本やベトナム村落のような明確な成員権が無く、村を範囲とした祭祀圏も無いというなら、それはそれでよい。いずれにせよ著者の記述だけでは、カンボジアの村が、そこに住む人々にとってどのような意味をもつかがわからない。これでは、村という分析範囲の設定も、著者が批判の対象としている「ステロタイプに基づいたカンボジア研究」の限界を超えることができていないのではないかと、この疑念が浮かぶ。

一方で、結論の直前の第 9 章になって初

めて叙述が始まる、寺院建造物の再建についての寺院共同体の議論は、本書におけるカンボジアの農村地域についての唯一の共同体に関する具体的記述であり、注目を惹く。村落＝コミュニティという既存の枠組みに固執せず、いっそのこと寺院共同体を分析の中心に据えてみたならば、全く新しいカンボジアのコミュニティ・スタディが描けたのではないだろうか。

しかし、以上のような点があったとしても、本書に示された著者の研究の価値は小さく否定されるべきものではない。

大学院時代、著者は「ドンデーン村プロジェクト」を自分の目標とする研究として、研鑽を積まれたという。著者の業績には及びもつかないが、評者も同じく同プロジェクトを大学院博士課程時代に読み、大きな影響を受けたひとりである。本書は、著者が希望するように、ドンデーン村のモノグラフと同様に、長く読み継がれる書物であると確信する。

上田 元. 『山の民の地域システム—タンザニア農村の場所・世帯・共同性』東北大学出版会, 2011 年, xvi+432 p.

佐藤廉也*

アフリカで調査にたずさわる多くの地域研究者にとって、スケール・ギャップ問題というのは切実ではないだろうか。対象が都市であれ農村であれ、アフリカのローカルな現実

* 九州大学大学院比較社会文化研究院

を知ろうとすれば、まずはコミュニティや村落に入ってマイクロな情報を収集するが、たとえマイクロな社会の現実を深く知ることができたとしても、それがアフリカのなかでどの程度の一般性をもつのかを知ることは困難である。たとえマクロな統計や資料、あるいはリモートセンシングなどを用いて一国あるいはグローバルなレベルで研究を進め、マクロとマイクロを結びつけようと試みたとしても、この2つのスケールの間には大きなブラックボックスがあり、対象社会の一般性の問題は依然として解決していないことに気付くだろう。

本書は、「地域システム」という地理学的な概念を用いて、マクロとマイクロの間にあるスケール・ギャップ問題を埋め、ひとつの村を超えた広域の有機的な結びつき、あるいはそれらがグローバルなインパクトに対して一様に反応するのではなく、逆に空間的に分化していく理由を明らかにしようという、困難な作業の試みである。対象として、タンザニア北東部、キリマンジャロ山の西方にそびえるメル山の、山腹（高地）から山麓、さらには低地平原にかけて垂直的な広がりをもって分布する複数の村々を取りあげ、「山の民の地域システム」を浮き彫りにしようとする。一読して驚くのは、およそ15年かけて収集された多量かつ詳細なデータと、それを分析するためのきめ細かな概念群である。本書は基本的に単独調査によるものであり、筆者のフィールドでの卓越した調査能力と、明晰であると同時に粘り強い思考力を証明するものである。

本書の分析の焦点は、1980年代のタンザニアにおける経済自由化以降現在に至るまでの、メル山斜面地域における社会経済変容にある。つまり、経済自由化という「マクロ経済的インパクト」が、メル山地域に暮らす人々の生計にどのような影響を与えてきたか、という問題設定であるが、筆者はそれを均質な変化ではなく、マイクロな地理的条件によって人々の取り得る生計戦略が制約され（場所選択性）、また地理的条件が同じであっても世帯の社会経済的地位によって異なる反応が生じ（世帯選択性）、さらには世帯間を結びつけるさまざまな社会関係によって場所ごとに異なる結果が生じ（社会経済的共同性）、結果として空間分化が進み、分化した場所ごとの相互作用がさらに地域システム全体を変容させると考える。まずは本書の概要を章構成に沿って以下に述べる。

まず第1章では、上記の概念群が説明され、メル山斜面の「地域システム」の分析枠組みが示される。先行する地域研究のレビューにおいて筆者は、従来の多くの小農経済論や農村開発論がマイクロとマクロの間にある「ローカルな場所のグローバルなネットワーク」としての地域システムの視点を採用してこなかったことを指摘し、本書が対象とするような中長期的な分析にとってこの視点が重要性をもつと強調する。

続く第2章で、メル山地域の概観をおこない、植民地期以降の農業集約化の流れ、コーヒー生産の隆盛と経済自由化以降の衰退、そしてそのなかで展開した人の移住（山腹の伝統的メル人村落から山麓、低地へ）と

それに伴うモノの流れ（食糧生産や家畜放牧の山腹から山麓・低地への下降や、山腹における酪農生産のための飼葉の山麓・低地から山腹への上昇）を、交通インフラの概要を含めて記述する。そのなかで、山腹、山麓、低地から6つの調査対象村が選ばれ、それぞれの村の概要と特徴が示される。

第3章は、経済自由化によって生じたマクロ経済的インパクトの根幹をなす変化、つまり小農がコーヒー生産から徐々に撤退し、代替的に灌漑利用による野菜生産と酪農の機会が増大した流れを示し、そのなかで山腹、山麓、低地の場所選択性がどのように働いたかを分析している。経済的価値の低下したコーヒー生産からの脱却は、灌漑利用や酪農生産などへの参入可能性によって差異が生じており、世帯レベルの意思決定が集落レベルで採用可能な生計戦略に規定されていることが強調される。

以下の各章では、特定の場所やテーマに焦点が絞られ、マクロ経済的インパクトに対する多様な反応が個別に分析されている。まず第4章では、山腹と低地を結ぶ結節点に位置する山麓の多民族混住村（ングルドト村）における土地取引、人口移動、社会的ネットワークなどの特徴が吟味され、これらの村が筆者の最初の予想に反してコーヒー生産からも脱却できずに低収入経済に甘んじている現状が示されている。筆者はこの村が経済的に周辺的な地位にあることによって、土地売買が進行し社会経済的な高い流動性を示す結果となっていると述べている。

第5章は半乾燥の低地平原の村に焦点が

当てられ、食糧作物流通の広域化によって刺激された結果、灌漑基盤整備に伴って商品作物生産が増大した様子が描かれている。水利組合における灌漑水路の運用は大土地所有層に偏っている一方で、大土地所有層から下層世帯への耕地の小口貸与もみられ、従来の社会経済関係を大きく変えることなく商品生産が拡大しているという指摘が興味深い。

第6章はひるがえって、農業集約化が進んできた山腹における新しい農村零細企業活動としての牛乳家内加工について、その取引関係や世帯内の性分業に注意が払われつつ記述・分析されている。従来小規模な自給補完的生業として女性が担ってきた牛乳生産が、取引規模が増大するにつれて変容し、女性が現金を介在する取引をおこなうとともに男性の投資や取引回路が重要性を増しつつあることなどが指摘される。

第7章は、1990年以降タンザニアにおいても広くおこなわれるようになった森林の参加型管理や造林活動について、山腹最上部の村を事例にその経過が記述され、政府を通じて降りてきた「外来回路」と従来の社会経済的共同性による「在来回路」がいかに調整されて森林利用・管理に関する合意形成が試みられているかが示されている。木材の経済的価値の上昇によって自主的に造林活動をおこなう世帯がいる一方で、十分な耕地をもたない土地貧困世帯が造林を強制されることによって生計安全保障が脅かされ、それが「社会関係の在来回路」によって調整される過程を指摘する一方で、ローカルな利害を理解しないまま鳥獣保護を目論む国立公園側の問題

点が指摘される。

最終章「まとめと展望」では、以上の総括として山腹・山麓・低地の「地域システム」の全体像が示されるとともに、以上のアプローチによって得られた情報を、GISを用いたボトムアップ型のシミュレーションに応用することによって、資源の参加型管理を模索する実務の場に活かす可能性について述べられている。

以上のように、本書ではメル山地斜面地域において、マクロ経済的インパクトへの対応の結果として生計多様化・空間分化が生成されていく過程を、場所選択性・世帯選択性・社会経済的共同性という3つの変数によって説明を試みているが、なかでも評者にとって興味深いのは社会経済的共同性の程度によって生み出される生計戦略の多様性やその調整的な役割である。たとえば灌漑整備に伴って商品作物生産が進む低地平原では、大土地所有層から小土地所有層への土地の貸与によって格差の拡大が抑制されており、一方山腹の村では、企業的な牛乳生産が潜在的に可能であるにもかかわらず、女性の相互扶助的なネットワークがそれを抑制している。こうしたモラルエコノミー的な側面は、経済自由化による変容を経た後にも依然としてメル人社会に存在し、経済格差の拡大を抑制しつつ生計安全保障の一助となっているのだと思われる。

対照的に、社会経済的共同性を発揮するための条件が不安定であるとされるのが山麓のングルドト村で、ここでは灌漑を利用できないこともあって新たな市場への参入ができな

いまま停滞するコーヒー生産に甘んじており、こうした状況が村の社会的流動化を進めているという。この事例は逆に、メル人社会の共同性とその役割を考察するにあたってきわめて重要と思われる。しかしながら評者には、ングルドト村でそもそも灌漑整備が進まないのは何故なのか（純粋に自然条件なのか、あるいは移民村としての歴史的条件、あるいは混住村であることがある程度関係しているのか）、言い換えると、灌漑の利用が制限されていることと、混住村であること、土地の売買や移住が頻繁であることが互いにかなる因果的な関係をもっているのか、本書の記述内容からははっきりと読み取ることができなかった。本書の議論が全体として論理的に明快に構成されているだけに、この部分の曖昧さが目についた。

あるいは、大農園の再配分によって形成された混住村であるというこの村の歴史的条件が原因となって社会経済的共同性の再生が困難になり、それが停滞の根本的な原因である可能性もあるのだろうか。これらをつきつめていくと、他の村々におけるメル人の社会規範が彼らの経済活動にとってどの程度重要なものであるのかを、浮き彫りにすることができるのかもしれない。評者の行き過ぎた想像であろうが、第4章で筆者が一言だけ触れているウィッチクラフトのエピソードには思わず目を留めてしまった。ひょっとすると、混住村ならではの社会的軋轢を背景とする現象なのではないだろうか。

一方、山腹上部の村で進行する森林資源の利用と管理の問題は、筆者の今後の研究の展

開を予想させる興味深いものである。この村の事例では、森林資源の管理問題でしばしば問題とされるような、個人（世帯）と集団（村）の利害におけるジレンマ状況はみられず、問題は小農の生計活動における森林の位置を認識できない鳥獣保護派（国立公園）にあるように思われる。本書を読む限り、造林が経済的に利益を生むという事実がある以上、解を得ることはさほど困難ではなく、世帯ごとの最低限の耕地面積を保証したうえで森林保護区の違法伐採さえ厳しく監視すれば、造林の強要などしなくとも森林劣化の問題は生じないのではないかとも思えるが、単純すぎる見方であろうか。

この資源管理問題と関連して、筆者がこうした研究成果を、GIS を利用したボトムアップ型のシミュレーションによる意思決定支援の実務に生かすことを提案しているのも、興味深く、筆者による今後の研究展開として期待したい。ただし、筆者が想定しているような、現実を忠実に再現することを目指すような複雑系のシミュレーションは、評者にはそれほど期待できるものには思えない。モデルが複雑になればなるほど、その信頼性の検証

は困難になり、モデル作成者の想定した挙動を再現するだけのものになりがちである [楠田・巖佐 2002]。これは、筆者が指摘するリモートセンシングのマイナス面よりもさらに危険なものになり得るように思われる。意思決定支援としてであれば、挙動の理解が可能な単純なモデルを組み合わせる方が良いのではないだろうか。

本書が細かな事実と概念を精密に組み立てて構成されたものであるため、評者の能力の限界により誤読をした部分も多々あるのではないかと思う。しかし、本書がたぐいまれなフィールドワークの才能によってなされた希有の力作であることは間違いなく、評者はその能力と努力に脱帽するばかりである。本書はアフリカの地域研究者にとって必読であることはもちろんだが、とくに、若手の地域研究者や地理学者の多くに本書が読まれることを願う。対象に「広く深く」せまるための教科書として、このうえない著作だからである。

引用文献

楠田哲也・巖佐 庸. 2002. 『生態系とシミュレーション』朝倉書店.